

4

騙

松尾 信一

信州大学

菊池東水著『解馬新書』卷之二（嘉永5年・1852）「騙篇第九」夫れ騙は西洋及び支那，馬をして駿良ならしめんと欲すれば，則ち其の辜丸を断つて，以て其の慾念を絶つ。或は牛・羊・豚の類，食料に供するもの必ず丸を断つて，以て肥美を爲す。これを断つこと，人畜共に法有り，鬪官及び寺人，其の勢を削る。

韻会に曰く，勢を外腎と爲す，馬の騙，牛の宦，羊の羯等，皆な相同じ。是れ肥易きなり。但し，古法いまだ其の伝を詳らかにせず。

所謂の官刑恐らくは陰茎を断つ。古，腎，精を爲ると謂ふ。又，辜丸を外腎と名づく。又，腎子と称す。或は囊を呼んで腎囊と曰ふ。

邦俗いまだかくの如く実測を尽すもの有らず。とある。

2007年の大槻玄沢生誕250周年・没後180周年記念の年を機会に，静嘉堂文庫所蔵の「紅毛扇馬訳説」（写本）を調査した。静嘉堂本は「革甲秘訣」の分類名の中に「革甲秘訣・仏郎機考・紅毛扇馬訳説・唐山流馬書・阿蘭陀馬書」の5種類の写本が同一綴にされていた。

「紅毛扇馬訳説」は本文の末尾に，「時に文化5年（1808）戊辰仲冬一陽来復の日知非齋中に識す」とある。さらに，断丸（キンキリ）：勃乙斯書工の部第768号の記事の末に，己巳6月（文化6年）の記とある。

本文の一部を記す。

茂質嘗て和蘭にて常牛を「クーヘイスト」という，食料となす。牛は必辜丸を取り去るなり，其丸を去りたる牛は「オス」と名くという。

長崎にて「キン切り牛」と呼ぶ。……肉はよく肥腴味ひ甘美を加ふという。退いてこれを考に和蘭内景の説に辜丸は男子の精を製するの官たり，其究理は解剖図説の諸書に詳なり。禽獸に於けるも亦然り，其製精の器を脱去しては慾念興ることなし。……凡そ食料となす者は豚・羊或は鶏も取り去るとなり。通詞の輩に聞くに，牛は其陰囊に就き囊皮を浮して小刀を刺入れ開きて辜丸をあらはし，其丸子に附着せる筋脈を小刀背にて刮げ離し丸を抜き出し，其痕を縫ひ番瀝青をぬり，其上に石灰を摻りかけ置く……不日に愈ゆるなり。……鶏は肛門に指をさしこみて直に囊を割きて丸を取るなりと。扱彼邦にて人も持戒の法徒は間，辜丸を取去る者ありと，これ慾念を絶つためと聞ゆ。我邦の羅切の意，唐土の官刑に似たることにて実は大に異なり，此は唯其用器を断なり，情念は其内に尚動くなり。彼は其根元を絶つ，故に丸を脱して後は其情萌動することなし。これ本を窮むると極めざるとの精粗の差ありというべし。但此術西土内景の理を究めし後に出たるなるべし。

寛政初年（1792年）漂客光太夫が話説に，魯西亜国にては王宮にて音曲の事を主る者24人あり，其中3人づつ順次に辜丸を断つ。其者謳歌殊に美音あり，これ房室の事なければなりと。

断丸 勃乙斯書工の部第768号

「リュツヘン」は陰囊を切り割きて辜丸を脱去るの法なり。これを馬に施すに三要事あり。其一は泌乳馬に於て施す，生れて第9日或は第14日までの内に切断するを定式とす，此日数を経れば其両辜丸外に見はれ下に垂る此時を以て切断の常候とす。静嘉堂文庫の「紅毛扇馬訳説」は以上であった。

ところで，大槻茂雄編（1912）『磐水存響』印刷本には，上記に加うるに，「附号」として，享保年間の阿蘭陀馬術家ケイヅル関連の「阿蘭陀馬書」の断丸の記述の紹介と「新案」として，和蘭管馬官・烏蒲泄兒微都の馬術書の断丸の訳。「贅言」茂質按に，辜片を断つ法……羅旬 Eviro, Varr, Castro, 仏蘭西 Chatrer, Mutiler Chaponner と呼ぶ。……支那は「臙仙肘後経」に騙とあり，……騙へノコナキムマとあれど……騙馬，宦牛，羯羊，鬪猪，斂鶏，善狗，淨猫，皆其勢を削るなり，是肥易するなり。

末尾に，大槻如電の我が祖父磐水は150年前此（扇馬）訳説を作れり，とある。

大槻玄沢の「紅馬扇馬訳説」は江戸時代で，人や家畜の去勢について詳しい考証である。